View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai Gaidai University Repository

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

三星堆出土青銅器管見(下)

著者	伊藤 道治
雑誌名	研究論集
巻	78
ページ	93-108
発行年	2003-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006317/

関西外国語大学 研究論集 第78号（2003年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.78（Aug. 2003）

三星堆出土青銅器管見

（下）

伊 藤 道 治

Ⅲ—1 尊と罍

尊と罍は、殷周青銅礼器の一種である。三星堆では、K1からは竜虎尊（挿図48）のほか、羊首犧尊・瓿・盤・器蓋各1が確認されているが、竜虎尊がほゞ完全な形であるほかは、いずれも残片のみで、復原も不可能であり、K1では青銅礼器はほとんど重視されなかったと言ってよい。たゞ竜虎尊（K1：158、258）の体形は長江流域に多い大口尊であり、しかも腹部の主文は食人虎とよばれる文様で、安徽省阜南県淝河出土の竜虎尊（挿図49）の文様と同一であるため、人びとの関心をあつめた。当然阜南との間に文化の交流があったことを示しているからである。金属としての青銅の質も阜南のものが優れているし、主文の虎の表現も阜南のものが生き生きとしているのに対し、三星堆の虎は迫力に缺ける。地文に至っては、三星堆のものは各要素が崩れて緊密さがないことなどから見て、竜虎尊のモチーフが伝えられ、三星堆で模倣したものであろうが、鋳造の基礎になる模型を造る段階からして充分な技術がなかったことがうかがえる。その他の器については、特に言うべきことはない。これに対して、K2からは大口尊8器、円罍3器、方罍—蓋とも—1器、大口尊の破損したもの2器分、計14器が発見された。ほとんどが器高50糎以上の大型のものである。

この尊と罍は両者とも酒を貯えておくもので、中原地域でも盛んに使用されたものであるが、尊・罍とも中原のものとは体形、文様が異る。とくにこのK2からはこの2種しか発見されていないのが注目される。一体青銅礼器には、食器としての鼎・甗・甑・簋・豆など、水器として盤・匜、酒器としての爵・觚・斝・盉・卣・壺などがあり、特に酒を飲む時に使用する爵・觚・斝などは中原地域では一般社会の土器製のものをふくめて最も普遍的なものであり、また食器では鼎・甗・簋などが一般的に使用されたが、三星堆ではK1の残片を除いて尊と罍の2種しか発見されていない—或いは使用されていなかったと言うべきか—ので、中原や長

江中流域とも異った独特な用法であったと言うべきであろう。

ところで、この尊と罍との文様を見ると、最も面積の大きい腹部―酒を容れる部分で、容器としての中心部―の文様の主文は二つの形式に分けられる。その1は、獸面の下顎を左右に分割した開口式とも呼ぶべきもので、従来から饕餮文、怪獸文と呼ばれてきたものである。中原地域の文様では、犬歯の巨大化した牙を左右の開口部の上口唇の両端につけたものが多いが、三星堆をふくめ、長江流域では牙の奥に、歯列を付けたものが多い。三星堆では『報告』に言うⅡ式円尊（K2②：109)、Ⅳ式円尊（K2②：146)、Ⅴ式円尊（K2②：151)、Ⅲ式円罍（K2②：159、挿図50)、円罍残片2（K2②：39）の5器である。このうちⅣ式・Ⅴ式の円尊とⅢ式円罍は圈足が高く、圈足の獸面文は虎耳角をつけ、額の上に牌様の飾りがあり、下顎の先端は外側に巻くという独特の形式である（施勁松「論我国南方出土的商代青銅大口尊」『文物』1998年10期)。この圈足の獸面も開口式で、切開された左右の下顎の縁に沿って牙と歯列をつける。この形式の獸面も独自性が強く、中原地域では一般的ではない。たゞしこの獸面は生硬で動きに乏しいので、この形式の獸面を硬式と呼ぶ。この3器以外のⅡ式円尊（K2②：109）は、圈足の獸面も腹部と同じく一般的な開口式であり、円罍残片2（K2②：39）は、圈足部を缺いている。

この歯列をともなった開口式獸面の口は上編第二章で述べたG型銅鈴（挿図33）にも用いられている。この口は鈴の形にあわせて作られているため、陝西城固県蘇村出土の獸面の左右両側の口の一方のみを左右対照になるように造形している。しかし尊や罍では左右に切り開かれた下顎に沿って歯列と牙が表現されるため、G型銅鈴や蘇村の獸面とは異質のもののように見えるが、いずれも牙の奥に歯列をつけるという点で通じるものがあり、同じ造形理念によって表現されたものとすることができる。従って城固と三星堆の間には交流があったことを示している。たゞ歯列がどのような意味をもっているのかは明らかではない。

第二の獸面とされているものは、眼・胴・角・尾などの造型は、開口式と殆どかわりはないが、口の造型が変化する。上下の口唇を僅かに開き、横にのびた口の両端すなわち口角で、上下の口唇を合わせてやゝ上にあげ、或いは更にその先端を内に曲げたものもある。僅かに開いた口内の上縁に、先端がとがって鈎状に曲がった歯が数本ある。このような口を一応平口式と呼んでおく（先にふれた旋勁松氏は横貫口と呼ぶ)。この口をもったものはⅢ式円尊（K2②：112)、Ⅳ式円尊（K2②：79、挿図51)、Ⅴ式円尊2器（K2②：127、K2②：129)、Ⅰ式円罍（K2②：70)、Ⅱ式円罍（K2②：88)、円罍残片1（K2②：103)、方罍（K2③：205）の8器である。

ところで、この平口をもった動物の文様も獸面文と呼ばれているが、果たして饕餮文のような獰猛な哺乳動物―勿論想像上の動物ではあるが―を表現したものなのであろうか。例えばⅡ式円罍（K2②：88、挿図52）を見ると、口は顔面の幅一杯に横にひろがっている。私はこう

した平口の文様を幾つか集めてながめているうちに、何とはなしに連想したのは魚のアンコウの口である。この魚は積極的に泳ぎ廻って獲物を求めるのではなく、海底にひそんで近づく魚を待ち、一氣に大きな口で咥え込んでしまう。しかも歯が鉤状になっているため、咥え込まれた魚は、アンコウの口から逃れることはできないと言われる。勿論この平口式の動物がアンコウ或いはそれに類した魚類とは断言できない。事実、平口式8器のうち円罍残片1（K2②：103）を除く7器は、すべて足―3本の長い爪で表現される―が口の周辺に表出されているからである。或いは淡水に住む鰐のようなものかも知れない。当時の長江流域は、現在より水量も多く、現在三星堆の近くを流れる沱江も、おそらく水深もあったであろう。従って鰐なども長江の可成り上流まで住み得たと考えてよい。江西省新干県大洋洲の商代大墓で発見された酒の容器である壺（XDM：45、挿図53）の頸部の文様は、平口式であるが、やはり口の横に足を表出している（なお腹部の主文は開口式であるが）。もっともこの大墓から発見された青銅器にも平口式の文様があるが、三星堆ほどには足のある率は高くはない。従って三星堆では、平口式の動物は足をもったものとして意識されていたと言えよう。

たゞ一つ足のない平口式の器である円罍残片1（K2②：103）の腹部の主文は、平口の左右に、足をつけるかわりに、さらに開口式の下顎をつけ、その上下の顎には歯列が加えられており、開口式の上顎の前縁に平口式を含むという二重構造になっている（挿図54）。たゞし同じように硬式且つ開口式の獣面でも、圈足の文様は、その高さによって異る形をとる場合があることに注意する必要がある。例えば腹部の主文が平口式のV式円尊（K2②：127）、同（K2②：129、挿図55）、円罍残片1（K2②：103）は、圈足が低いため、圈足の開口式獣面は丈が低く、この場合は歯列が表わされず、上下の顎の間は雷文などで埋められている。

このように見て来ると、三星堆の青銅礼器は、尊と罍に限定され、しかも両種を通じて、器の体形に応じて文様に一定の規格があったと言うことができ、組織的な鋳造が行われていたと言えよう―三星堆で鋳造が行われたのか、或いは可成り遠方から購入したのか、今の所決定的な結論は出ていないが―。しかも圈足に硬式獣面をもったものは比較的限られた期間内に造られた可能性も考えられる。さらに一歩を進めて言うなら、このような一定の規格をもった青銅器の製作を発注し、使用した集団は、おそらくかなり統一された宗教意識をもった集団であったと言うことができる。圈足に硬式獣面をもった青銅器のうち、腹部の主文が開口式の3器―Ⅳ式円尊（K2②：146）、V式円尊（K2②：151）、Ⅲ式円罍（K2②：159、挿図50）はいずれも高圈足で、尊の2器は類似した文様の構成である。また腹部の主文が平口式の3器―V式円尊（K2②：127）、同（K2②：129、挿図55）、円罍残片1（K2②：103、挿図54）はともに低圈足で、尊の2器の文様構成は非常に類似している。このような事実は、それぞれ尊2器と罍1器が一組として使用されたことを示しているのではなかろうか。

以上のほか、青銅礼器の形態上の面で注目すべきことは、圈足の下縁に沿って幾つかの小孔

をあけた青銅器があるという点である。主文が開口式のものは、Ⅱ式円尊（K２②：109)、Ⅲ式円罍（K２②：159、挿図50）の２器、平口式のものは、Ⅲ式円尊（K２②：112、挿図56)、Ⅴ式円尊（K２②：129)、Ⅱ式円罍（K２②：88)、方罍（K２③：205）の４器で、単純に考えれば、尊１罍１で１組を構成したということが考えられる。

一体、青銅礼器と言うものは、宗廟など祭祀の場で、神霊の依る神主の前に安置され、酒食を神の霊に供えるものと伝統的に考えられて来た。しかも祭祀が終れば、その酒食は人びとに饗され、饗応がすめば、礼器は清められて、庫に収納されたであろうから、特にある場所に固定して設置する必要はなかった筈である。

ところが、以上の６器は何かの理由で固定される場合があったと見なければならない。私はこれらの器は動揺するものに載せて、移動しながら使用する時があったのではないかと考えている。おそらく水上を移動する舟、或いはそれに類したものに器を載せ、波による動揺にも器が転倒することがないようにしたもので、そのようにして水神の祭祀を行ったということを考えてもよいのではなかろうか。甲骨文においても河神―黄河の神―を祭ることが頻りに行われているが、その場合は岸に設けられた祭壇において行われたと一般に考えられている。しかし長江流域では当時すでに舟運が盛んに行われていたと見られるので、人間が直接舟などを利用して、水上で祭祀を行ったとしても不思議はない。

以上Ｋ２出土の尊と罍とについて述べてきたが、Ｋ１からは先にふれた竜虎尊のほかに、肩部に羊の頭を３個つけた羊頭犧尊（Ｋ１：163、Ｋ１：59)、甑（Ｋ１：130)、盤（Ｋ１：53)、器蓋（Ｋ１：135）が発見されているが、いずれも残破しており、その他の器種は発見されていない。したがって三星堆では、中原で最も普遍的に見られる食器の鼎・甗・簋、飲酒器である爵・觚・斝が全く見られないということになる。同じような傾向は、江西省新干の商代大墓、或いは長江流域や三星堆とも関係の深い陝西南部の城固県一帯の遺址でも見られ、飲酒器は発見されていない。したがって長江中下流域では、爵などの飲酒器は受容されなかったことになる。

では、これらの地域では飲酒器として何を使用していたのであろうか。三星堆―他の遺跡のことは本稿ではふれないが―では、土器の鳥頭柄勺、高柄豆、尖底盞などが飲酒の器として使用されたと考えられる。なかでも特徴的なのは鳥頭柄勺で、半球形の碗に土製の柄をつけたもので、その柄に鳥の頭部を刻画したものである。李伯謙氏によると、三星堆文化第一期の前段からこの器があらわれ、前段では水鳥の頭部の形をしているが、その後段に変化がはじまり、第二期前段ではその造型が最も発展するとともに、鷹などの猛禽類の頭の形に変化し、第二期後段になると、この鳥頭柄勺そのものが姿を消すとされる。これと入れ替るように第二期前段から尖底盞があらわれ、これは第四期後段まで形をやゝ変化させながら継続する。李氏は三星堆の文化はこの第二期が一つの頂点であったとしている（李伯謙「対三星堆文化若干問題的認

識」、北京大学考古学系編『考古学研究』Ⅲ、1997年)。K1からは第二期前段の尖底盞が出土しているので、K1の時代の上限は第二期前段と考えてよい。このK1からは前述の如く竜虎尊が出土しているが、この尊の本歌である安徽省阜南県の竜虎尊と同時に出土した虎頭獣面尊(挿図57)—開口式—を本歌としたと考えられる牛頭獣面尊(Ⅱ式円尊残片、K2②:109)(挿図58)がK2から出土している(施勁松前掲論文)。『報告』ではK1とK2との年代差はK1が百年近く早いとしているが、これに対しては考古学者の間でも異見があり、必ずしも考え方は一定していない。K1とK2との間には言う程の年代差はないとすることができる可能性がある(Ⅰ—3人頭像頁176参照)。従って両坑出土の青銅器の年代は殷前期から中期初めのものであり、三星堆文化の最盛期のものであったと言うことができる(李伯謙前掲論文)。

Ⅲ—2　青銅器技術の伝来

これまで、三星堆における主要な青銅製品である面具、人頭像、鳥形製品、青銅礼器などについて見て来た。こうした青銅製品鋳造の技術は、中原における二里岡期以来の技術が長江中下流域を経て、長江とその支流を遡ることによって四川の成都盆地にまで伝えられたと考えられている。前節で見た尊と罍などの体形や文様なども、湖南・江西・安徽などで出土したものとの類似が強く、この三星堆の文化は、長江系の文化に属するとする考えが強い。

しかし、三星堆の青銅製品でも、長江流域とは結びつかないものがある。たとえば第二章で述べた鷹型—犬鷲とする説もある—の猛禽は長江中下流の文化ではあらわれないので、三星堆独自のものである可能性が強い。しかもこの猛禽が、三星堆における宗教面で重要な位置を占めていたことを考えると、その独自性を認めざるを得ないのではなかろうか。もっとも、新石器晩期の石家河文化(湖北省天門市石家河遺跡)には両翼を展げて飛翔する鷹を表わした玉製品(W6:7)がある。幅4糎、厚1.2糎の小さなものであるが、これとの関係を示唆する研究者もある。また同じ遺跡から出土した玉製の人頭像(W6:17、W6:14など)には耳飾をつけたものが数个あり、眼、口の表現法も類似する所があり、これも三星堆の人面などの先駆形態ではないかとする説がある(挿図59)。これらの玉の人面は長6糎ほどのものが大型で、厚さは0.5糎前后、小孔があけられており、護符として身体につけていたと考えられるので、何らかの宗教的意味は認められていたであろうが、三星堆の人面や人頭像とは、大小の規模も、社会的機能も異るので、直接的に結びつけることはできない。

むしろ人面としては、前掲の新干商代大墓出土の青銅製の双面神人頭像(XDM:64)や陝西南部漢中盆地の城固県蘇村出土の青銅人面が注目されるが、眼・鼻・口などの造型は三星堆の人面とは全く異質である。新干の双面神人頭像(挿図60)や城固の人面(挿図61)の眼は真丸く、いくらか出目であるのに対し、三星堆のものは切れあがった鋭い眼であり、新干や城固

の鼻は低い平たい鼻であるのに対し、三星堆のものは鼻梁が通った高い鼻が多い。口は三星堆のものが一文字に強く引き締めているのに対し、新干や城固のものは歯をむき出しにしている。従って顔立ちが全くことなるので、三星堆と新干・城固のものを一つにして扱うことはできないし、想像を逞しくすれば、三星堆の人面などの造型が、むしろ特異と言うべきかもしれない。

ところで、この城固県の渭河と漢水とにはさまれた一帯からは、1955年から76年にかけて多数の青銅器を出土した—たゞし学術的発掘によるものではない。そのなかには、蘇村において出土した方罍（76：139、挿図62）の如く、典型的な中原様式で、安陽の婦好墓から出土した方罍（856）の形、文様とも非常に類似しており、巧みな鋳造技術者が中原地域から来住していたか、或いはこの器そのものが中原から運ばれて来たのではないかと思わせるものがある。また蘇村から西北にある呂村で出土した簋（75：145）も、婦好墓出土の簋（832）と形・文様ともに非常に近い（唐金裕・王寿芝・郭長江「陝西省城固県出土殷商銅器整理簡報」、『考古』1980年3期）。この婦好墓出土の罍・簋は殷晩期の早期のものであり、ほとんど同時に同形式のものが漢中盆地に伝えられていたことになる。

一方三星堆と城固の間にも交流があったことを示すと思わせる資料がある。例えば三星堆のK1出土の羊頭犧尊（K1：163、K1：59）とよばれる大口尊の残片は肩部に3個の羊頭をつけ、腹部・圏足の文様は雲雷文で構成された獣面文であるが、これと非常に類似した大口尊（74：2）が城固からも出土している。肩部に羊頭をつけ、腹部・圏足の文様もともに雲雷文構成の獣面文である。たゞし三星堆のK1：163、K1：159は破損がひどく完全には復原できていないし、城固のものは写真が模糊としていて、充分な比較はできない恨みがあるが、さきにふれた獣面の牙歯なども両者の交流を示していると言えよう。

しかしK2出土のⅣ式円尊（K2②：79、挿図51）と城固出土の大口尊（64：1、挿図63）は、器の大小、体形、文様も殆ど同じで、ともに肩部に3個の牛頭と立鳥の稜をつけ、また牛頭の左右の角の間には夔竜形の飾りをつける。腹部・圏足の文様は平口式の獣面文であり、瓜二つと言ってもよい程に類似している。このような現象を説明するには、(1)長江中流の技術或いは製品が、一つは漢水を遡って漢中盆地に伝えられ、一つは長江を遡って成都盆地に伝えられた。(2)漢水を遡って漢中盆地に伝えられたものが、さらに城固から三星堆に伝えられた。(3)長江を遡って成都盆地に伝えられたものが、三星堆から城固に伝えられたとする三つの説があるかと思う。一般的には漢水・長江と分けず、長江流域として第1説で漠然と説明する場合が多いが、第2説は李伯謙氏（前掲論文）、第3説は施勁松氏（前掲論文）によって考えられている。例えば、城固出土の典型的な中原様式の方罍（76：139、挿図62）などは第2説で考えた方がよいように思えるし、一方二つの大口尊などは第3説で考えるべきかと思うが、いずれにしろ漢中と三星堆とは可成り緊密な関係が一時期あったことは確かである。たゞ長江中下流域の青銅器と言っても、北岸の湖北・安徽のものは中原青銅器の影響が強く、それに対して南

岸の湖南・江西のものは地域的独自性が強いのではないかと私は推測しているので、長江流域の青銅器の比較分類が進められるべきだと思う。

したがって、現在言い得ることは、前1200年から前1000年にわたる頃に、中原から南下し、長江流域を経由して四川・陝西南部との間に盛んに交通が行われていたということである。そして注意すべきことは、成都盆地と四川西北部とは文化の交流には見るべきものがなかったということ、また河南西部から渭水流域を経て周原地域に入るルート即ち函谷関ルートは、その理由は明らかではないが、殷末期までは殆ど使用されなかったということである。

さて、これまで青銅器の伝播は、長江中下流域から上流へと一方的に行われたという基調で説明して来た。しかし果たしてそれだけであったのだろうか。例えば新干の大墓で発見された耳に鳳鳥をつけた二つの円鼎（挿図39、46）は、三星堆ではじまった鳳鳥のモチーフが、夔竜形の足の目の形—三星堆の獣首冠の眼である—とともに新モードとして長江中下流に伝わり、一方陝西北部にも伝わったと考えてみることも必要なことかもしれない。また爪を誇張した足を持つ平口式の動物文も、動物文は中下流域から伝えられたかもしれないが、それに足をつけ、青銅器の文様として定着させたのは三星堆の人びとであり、それが長江を下って新干の壺（XDM：45）になったのかもしれない。また円尊や円罍の圏足に見られる硬式獣面文は、幾つかの例が三星堆でまとまって発見されているので、三星堆で定型化されたとすることもできる。

このように述べて来ると、思考の遊戯をしているようであるが、まだまだ明確に規定できない要素が多いからでもある。

おわりに

これまで3章に分けて、人間に関する面・像、鳥の形態及び青銅礼器について述べて来た。最後にこれら三つの分野の間にどのような関係が見られ、そのことが三星堆遺跡の性格にどのような意味をもつことになるかを考えてみたい。

この三星堆のK1・K2の二つの坑から出土した品々を所有し使用していた人びと—三星堆族と呼んでおく—の祖先の霊を象徴するものとして人面は造られたと考えられるが、これは単に祖先を象徴するだけではなく、獣面によって象徴される蛇性の土地神を征服したものとして人びとに認識されていた。そしてこの土地神は、神壇K2③：296の第三層にあらわれて、三星堆族が祭る神々のうちに加えられることになる。このように敗れた神を祭神に加えることは、殷においても、また古代日本などにおいても行われたことであるが、このようなことは、三星堆での主神—太陽神—の地位を相対化することになったであろう。

一方大立人像は、太陽神の祭りを主宰する大神官の象徴であったと考えられる。その祭祀の

場には、たとえば一号大型神樹が設置され、その近くでは実際の人間の神官たちが祭儀を行なっており、大立人像などはやゝ離れて設置され、人頭像で構成された神官集団の力を誇示していたのではなかろうか。そしてこの神樹に太陽神が降臨した。その際神樹の桃形果実に乗る鳥は、二号大型神樹の人語をそのまゝ神に伝える力をもっていた典型的な猛禽から退化して、果実の性を身につけて神に呼びかけるようになっていた。さらに神壇になると明らかに女を象徴する人面鳥が神の降臨を誘うようになり、女性の神官と一夜を共にする秘儀としての祭祀を受けた。このような変化は、太陽神の力が相対視され、人格的な神と見られるようになったのと表裏する現象であり、太陽神に対する信仰にゆらぎが生じていたことを示すものであり、それに併って大神官の宗教的権威をも動揺させることになったと考えられる。

しかし、当時の三星堆における宗教組織が最初から動揺していたわけではない。祭祀の際の主要な礼器であった尊と罍とがかなり統一された規格によって鋳造されていること、あるいは獸面に対してC型人面の荘厳化を計画したことなどは、統一された宗教意識をもった集団がその鋳造を命じたことを示している。たゞ問題は、鋳造の時期が限られており、その数量も多くはないし、人面の荘厳化は殆ど実行できなかった。このことは、ひいてはK1・K2に埋められたものが、長期にわたって造られたものではない、換言すれば比較的短期間—漠然としているが—に造られ、使用期間もそれ程長くなく、三星堆族の活動は短期間で終ったことを示しているようにも思われる。

ところでK1・K2の二坑のうち、K1からは少数の尖底盞と器座などの土器を出土しているのに対し、K2からは土器などの類はほとんど出土していない。したがってK2の器物は、一般社会の生活とは結びつかない孤立したものであると言わねばならない。そのため、K2出土の人面・人頭像にしても、青銅礼器にしても一般社会の動きとともに理解することができない。尊や罍は酒を貯えておく器であり、祭場に設置されたであろうが、その器から酒をくみ、それを地に灌いだり、飲むためには、土器の鳥頭柄勺や尖底盞を使用したと推定した。K2からはこれらが出土していないが、K1からは尖底盞が出土し、しかもその尖底盞は、三星堆の出土品による時期区分では、第二期前段にはじまるもので、K1のそれはこの第二期前段のもの即ち尖底盞の初期のものであることがわかっている。一方鳥頭柄勺は、第一期前段からはじまり、最初は簡単な水鳥風の鳥頭であったものが、最も精巧な鳥頭を刻画する第二期前段では、鳥は鷹などの猛禽類を描写するようになる（李伯謙前掲論文）。たゞこれらの鳥頭柄勺はK2からも出土していないので、直接的に結びつけることには危険を感じないわけではないが、おそらくK2出土の鳥型のものの基本が猛禽であり、人間と神とを結びつけるものであったことと表裏するものであったと考えてよい。したがってこの第二期前段の時期には鳥頭柄勺と尖底盞が共存していたことになり、K1とK2とは、それ程年代に差がないと考えた方がよいのではなかろうか。K1出土のBe型人頭像とK2出土のBa型人頭像とが同じ造型であったこ

とても矛盾はなくなる。

ところが、第二期前段が終わり、後段に入ると、極盛期にあった鳥頭柄勺は完全に姿を消してしまい、尖底盞はその後も少しずつ形を変化させながら継続する。この鳥頭柄勺の消滅がおそらく当時の社会内部に大きな変化があったことを示しており、その変化は青銅製の鳥の変化即ち猛禽のもっていた意義が弱体化したこととも関連していたのであろう。Ｋ２出土の器物―人面・人頭像・大立人像や礼器をふくめた―を使用していた祭祀集団が衰えて、この地を離れざるを得なくなった理由ではないかと思う。その祭祀集団の衰滅の原因は、集団内部における宗教的思想に変化が起きたことにより、集団そのものが団結を維持できなくなったことに在るのであり、外部からの圧力例えば侵入者による圧力によるものではなかったのではなかろうか。若し侵入者の圧力に敗れた結果であるとするならば、Ｋ１・Ｋ２の埋蔵品、特に人面・人頭像などはもっと激しく顔面を破壊されていたであろう。おそらく祭祀集団がこの地を離れるに際して、他者によって器物が再利用されることを怕れて軽度の破壊を加えたと考えることも可能である。

以上三星堆の遺物について、私の関心をひいた三種の青銅製品をとりあげて見た。その際、『華陽国志』などの古史関係の資料や口頭伝承―第一章でとりあげた「羌戈大戦」―などと比較対照することは、むしろ意識的に避けてきた。それは、古史にしても口頭伝承にしても、それぞれ独自に今後の整理研究が必要であり、現段階でこれと考古学的資料を恣意的に結びつけることは、よい結果を決して生まないと考えたからである。むしろ今回はＫ１・Ｋ２出土の各種の青銅製品を互いに比較対照させながら、このような資料からどのような世界を描き出すことができるかを試みてみた。その過程では、仮定に仮定を重ねて考えを組み立てなければならないことがあまりにも多かったため、本稿は一つの仮説に過ぎないと思う。指正を賜れば幸いである。書き終えた現在空想していることは、このような人面・人像や鳥・礼器などをはじめ、土器などをも含めて、同類のものは三星堆より西北の地域―茂汶地域―からは、現在のところほとんど発見されていないこと（李伯謙前掲論文）を考えると、三星堆族は西北からこの地に南下したものではなく、或いは南から北上した人びとの一部であり、その最北の前線であったのかもしれないということである。その意味でも金沙遺跡―住址・墓葬が中心と概報が伝えている―の正式報告が発表されることを願う。この金沙遺跡は三星堆と同文化であり、成都市内、三星堆の東南38粁の地にある（朱章義、張擎、王方「金沙遺址概述」『金沙淘珍―成都市金沙村遺址出土文物』文物出版社　2002年４月刊）。

挿図目次

〔注意事項〕目次の各項の記載は、資料名・資料番号・出典略稱・出典中の図版番号の順である。出典の略稱の説明は、目次末尾に、その正式の書名（論文名）・編著者名・出版社名（掲載雑誌名）・発行年月（雑誌は巻号）をあげる。三星堆以外の出土資料もできる限り資料番号をあげた。分類記号のみでは混乱をまねくからである。資料番号の不明のものは出土地名をあげて区別するようにした。

1　B 型凸目巨大獣面　K２②：148　『報告』　図58
2　A 型凸目巨大獣面　K２②：144　『陳著』　37
3　B 型人面　K２②：153　『報告』　図52
4　C 型人面　K２②：60　『報告』　図54
5　Da 型人面　K２③：119　『目録』　26
6　Db 型人面　K２②：331　『目録』　24
7　Ab 型人頭像　K１：6　『目録』　120
8　Aa 型人頭像　K１：2　『目録』　118
9　C 型人頭像　K１：5　『陳著』　12
10　Ba 型人頭像　K１：11　『目録』　121
11　Bb 型人頭像　K１：72　『報告』　図版４の１
12　Bc 型人頭像　K１：3　『報告』　図版４の２
13　人頭像　K１？　『陳著』　19
14　A 型人頭像　K２②：83　『報告』　図44
15　Ba 型人頭像　K２②：154　『目録』　7
16　Ba 型人頭像　K２②：17　『陳著』　18
17　Ba 型人頭像　K２②：118　『目録』　6
18　Bb 型人頭像　K２②：90　『報告』　図47
19　Ca 型人頭像　K２②：58　『報告』　図48
20　金製面　K１：282　『陳著』　87
21　A 型金面人頭像　K２②：45　『報告』　図49
22　B 型金面人頭像　K２②：214　『報告』　図50
23　大立人像　K２②：149、150　『報告』　図40
24　獣首冠人像　K２③：264　『目録』　77
25　大立人像顔面　K２②：149、150　『陳著』　1
26　B 型跪坐人像　K２③：04　『報告』　図42

27　大鳥頭　K２②：141　『目録』　70
28　金杖（部分）　K１：１　『東洋編』１　108
29　鳳鳥文（四羊尊腹部拓本）　『紋飾』　493　湖南省寧鄉県黄材出土
30　神樹上立鳥　K２②：194―１　『報告』　図65
31　鳥型鈴　K２②：103―８　『目録』　52
32　E 型銅鳥　K２③：239―１　『陳著』　62
33　G 型銅鈴　K２③：70―７　『陳著』　68
34　小神樹上人面鳥　K２③：272　『陳著』　8
35　A 型鳥　K２③：193―１　『目録』　72
36　円尊肩部鳥　K２③：23　『報告』　図版96の２
37　Ⅰ式銅円罍　K２②：70　『報告』　図145
38　鳳柱單　『陝西青銅器』　101　岐山県賀家村出土
39　鳥耳円鼎　XDM：27　『新干大墓』　彩版７の１
40　桃果上立鳥　K２②：213　『報告』　図66
41　A 型鳥型飾　K２③：193―４　『報告』　図87
42　一号大型神樹の鳥　K２②：94　『目録』　47－３
43　二号大型神樹の守護　K２②：194　『陳著』　53
44　一号大型神樹の竜　K２②：94　『報告』　図63
45　B 型竜形飾　K２③：145　『報告』　図82
46　鳥耳円鼎の夔竜形足　XDM：26　『新干大墓』　図17
47　銅神壇　K２③：296　『報告』　図129
48　竜虎尊　K１：158、258　『目録』　128
49　竜虎尊　『東洋編』１　54　安徽省阜南県朱砦出土
50　Ⅲ式円罍　K２②：159　『陳著』　85
51　Ⅳ式円尊　K２②：79　『報告』　拓片18
52　Ⅱ式円罍　K２②：88　『目録』　86
53　壺　XDM：45　『新干大墓』　図35の B
54　円罍残片１　K２②：103　『報告』　拓片27
55　Ⅴ式円尊　K２②：129　『報告』　拓片20
56　Ⅲ式円尊　K２②：112　『報告』　図69
57　虎頭獣面尊　『銅器』　図版10　安徽省阜南県朱砦出土
58　Ⅱ式円尊（牛頭獣面尊）残片　K２②：109　『目録』　82
59　玉人頭像　W６：14　『肖家屋脊』下　彩版二の１
60　双面神人頭像　XDM：67　『東洋編』１　76
61　人面　蘇村76：147　『城固銅器』　図版５の４

62　方罍　蘇村76：139　『城固銅器』　図二の１

63　大口尊　蘇村64：１　『城固銅器』　図四の１、２

略稱書目

報告　　四川省文物考古研究所編　『三星堆祭祀坑』　文物出版社　1999年４月

陳著　　陳徳安著　『三星堆―古蜀王国的聖地』　四川人民出版社　2000年７月

目録　　朝日新聞社編　『三星堆―中国5000年の謎、驚異の仮面王国』　朝日新聞社　1998年

東洋編１　　高浜秀・岡村秀典編　『世界美術大全集』東洋編第１巻　小学館　2000年９月

紋飾　　上海博物館青銅器研究組編　『商周青銅器紋飾』　文物出版社　1984年

陝西青銅器　　李西興主編　『陝西青銅器』　陝西人民美術出版社　1994年11月

新干大墓　　江西省文物考古研究所・江西省博物館・新干県博物館　『新干商代大墓』　文物出版社　1997年９月

銅器　　貝塚茂樹・伊藤道治他編著　『中国の美術』５銅器　淡交社　1982年９月

肖家屋脊　　湖北省荊州博物館・湖北省文物考古研究所・北京大学考古学系　『肖家屋脊―天門石家河考古発掘報告之一』　文物出版社　1999年６月

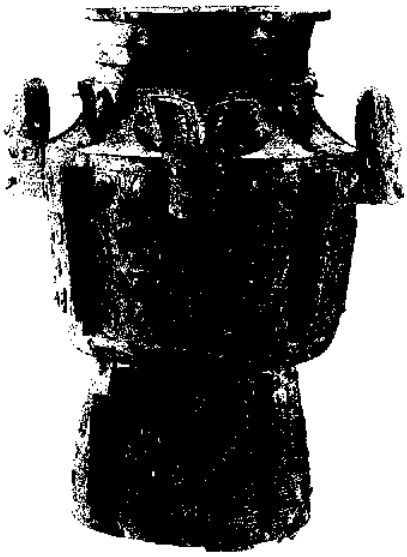
城固銅器　　唐金裕・王寿芝・郭長江著　「陝西省城固県出土殷商銅器整理簡報」『考古』　1980年３期

挿図

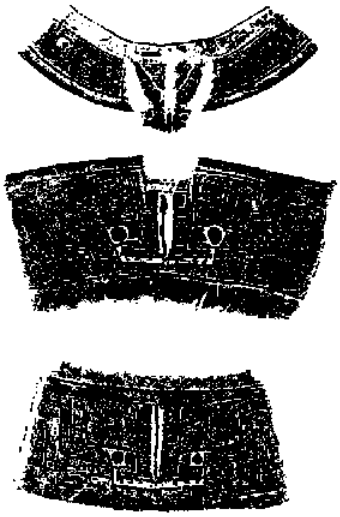
第Ⅲ章

48　竜虎尊　K１：158、258

49　竜虎尊　阜南県朱砦出土

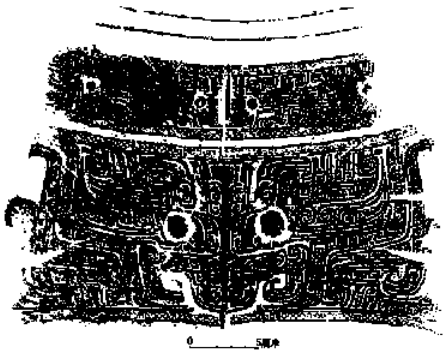


50　Ⅲ式円罍　K２②：159

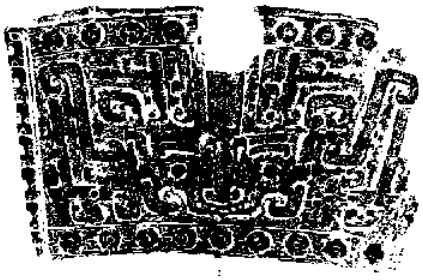


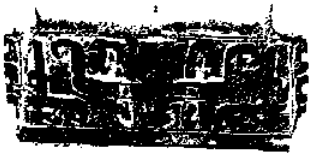
51　Ⅳ式円尊（拓本）　K２②：79

52　Ⅱ式円罍　K2②：88



53　壺　XDM：45（拓本）





54　円罍残片1　K2②：103（拓本）

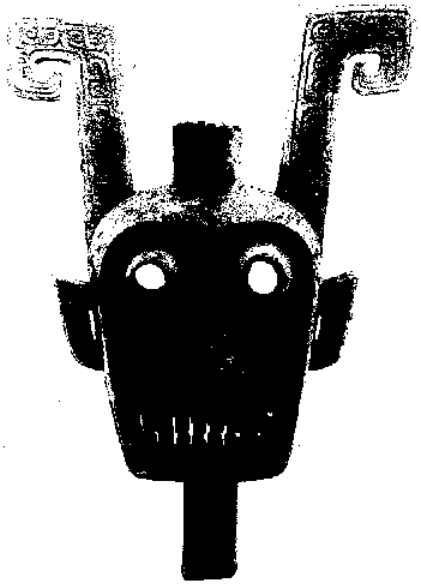
55　V式円尊　K2②：129（拓本）

56　Ⅲ式円尊　K2②：112

57　虎頭獣面尊　阜南県朱砦出土

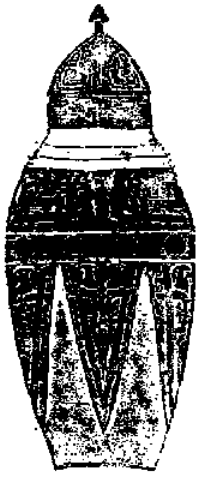
58　Ⅱ式円尊（牛頭獣面尊）残片　K2②：109

59　玉人頭像　W6：14

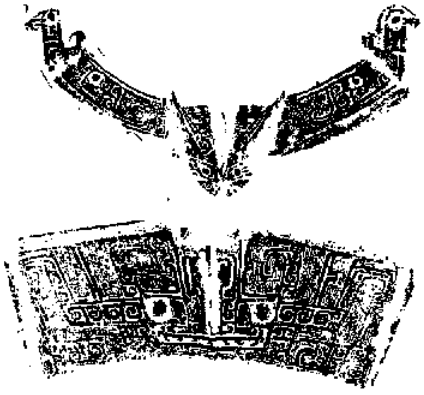


60　双面神人頭像　XDM：67

61　人面　蘇村76：147



62　方罍　蘇村76：139（拓本）



63　大口尊　蘇村64：1

（いとう・みちはる　国際文化研究所教授）